

<注>

1) それを示唆する結果がある。「家で勉強していてわからないところがあったらどうするか」という設問に対し、「放っておく」と答えたものが、NoStudy Kidsの場合にわずかだが増えているのである。小学生の場合、29.6%から37.9%へと増えている。中学生では39.1%から44.9%への増加である。

2) 家庭の文化的環境に着目したグループ化の手続きは以下の通り。

「家の人にはテレビでニュース番組を見る」「家の人から手作りのお菓子を作ってくれる」「小さいとき、家の人に絵本を読んでもらった」「家の人に博物館や美術館に連れていってもらったことがある」(以上4点尺度)「家にはコンピュータがある」(2点尺度)といった質問項目への回答をもとに、小、中学生のそれぞれに主成分分析を用いて、家庭の文化的環境を示す一次的尺度を作成した(親の職業や所得については、調査対象校の要望もあり残念ながら質問できなかった)。この尺度を用いて、小、中学生のそれぞれの調査対象者の数がほぼ3分の1ずつになるように、3つの「文化的階層グループ」を構成した(上位グループ、中位グループ、下位グループ)。

3. 「授業タイプ」の構造と影響

それでは次に、01年での子どもの学習はどのようなものになっているのかという問題を、授業タイプとの関係から分析してみることにしよう。

先の分析で、子ども達の学業達成を検討する際には、学校内での学習の「質的」な変化に注目する必要性が指摘された。しかしながら、89年調査には、それに関わる質問項目が含まれていないという理由から、変化そのものを焦点化することはできない。

一方、01年調査では、小学生・中学生ともに、国語と算数・数学の授業について、①教科書や黒板を使って先生が教えてくれる授業、②ドリルや小テストをする授業、③宿題が出る授業、④自分で考えたり、調べたりする授業、⑤自分のたちの考えを発表したり、意見を言いあう授業、という5つのタイプについて、それぞれの授業がどのくらいあるかを尋ねている。①②③は、いわゆる「伝統的」な授業を、④⑤は「新学力観的」な授業をイメージし、子どもたちのこうしたタイプの授業へのコミットの程度を把握することが調査者のねらいであった。この回答をもとに、これまでに、調査対象クラスの類型化を試みているが、結果的には「伝統型」や「新学力観型」ばかりでなく、「伝統的」な授業も、「新学力観的」な授業も同程度に「よく」行われている「全力型」や、「あまり」行われていない「あいまい型」といった型の授業も抽出された(苅谷他 2002)。つまり、10年間続いた学習指導要領のもとで、授業は「伝統的」から「新学力観的」への転換が起こっただ

けでなく、「新学力観」の導入によって授業のタイプが多様化し、それぞれが全力で押し進められる場合もあれば、逆に多様化があいまいさを生み出す場合もあることが確認されたわけである。さらに、詳細に検討を進めていくと、「新学力観」の導入は、国語と算数・数学という教科によって、また、小学校と中学校という学校段階によって異なる影響を及ぼしていることもうかがわれた。

また、ここ数年の「学力低下」をめぐる論争のもとでは、振り子のような学力論の影響を受けて、授業実践の報告も「伝統的」な方向に顕著に振れたものもあれば、「新学力観的」な方向を頑なに擁護するものもある。しかし、問われるべきは、教師の意図を越えたところで、「子どもたちが、どのような授業を受けていると感じているのか」「それが学業達成にどのように影響しているのか」といった、子どもの実態を把握し論じることであり、今後の授業実践の展開においてもこの点は必要不可欠と思われる。

以上のような問題関心により、ここでは、「新学力観」の影響を、教科や学校段階による相違に着目しながら「授業タイプ」を抽出することからはじめ、それと学業達成などとの関連を検討することで、学校内での学習の「質」に迫ってみたい。

(1) 「授業タイプ」の類型化

①分析方法

先にも述べたように、今回の調査では、小中学生ともに、国語と算数・数学の授業について、①教科書や黒板を使って先生が教えてくれる授業（以下「教科書学習」）、②ドリルや小テストをする授業（以下「ドリル学習」）、③宿題が出る授業（以下「宿題」）、④自分で考えたり、調べたりする授業（以下「考え調べ学習」）、⑤自分のたちの考えを発表したり、意見を言いあう授業（以下「意見発表学習」）、という5つのタイプについて、それぞれの授業がどのくらいあるかを尋ねている。この回答をもとに、「よくある」を4点、「ときどきある」を3点、「あまりない」を2点、「ほとんどない」を1点として、それぞれの回答について、クラスごとの平均をとったアグリゲイトデータを作成し、授業クラスを分析単位とする分析を行った。このデータに、主成分分析を適用し、抽出された成分を参考にしながら、授業の類型化を試みた。調査対象クラスは、小学校32クラス、中学校38クラスである。

②分析結果

小学校算数については、表3-10に示したように、主成分分析の結果、抽出された成分は2つである。第1主成分は「考え調べ学習」「意見発表学習」が多い授業であり、第2主成分は「ドリル学習」「宿題」が多い授業である。いずれの場合にも、教科書の使用頻度に大きな差はない。つまり、小学校の算数の授業は、教科書をベースにして、意見を発表し

たり、考えて調べたりするような学習を行う「教科書発展型」授業と、教科書で基礎的な内容を学習した後に、ドリルや小テスト、宿題で反復するような「教科書反復型」授業に類型化できる。

この結果をもとに、「考え調べ学習」「意見発表学習」と「ドリル学習」「宿題」へのそれぞれの回答を合計して平均をとり、その値を原点とした4象限（前者を縦軸・後者を横軸）をつくると図3-2のようになる。第1象限は、教科書をベースにして発展的な学習を行いつつも、ドリルや宿題での反復学習も行っている「教科書反復発展型」となる。また、第3象限は、教科書だけで学習を行う「教科書のみ型」となる。

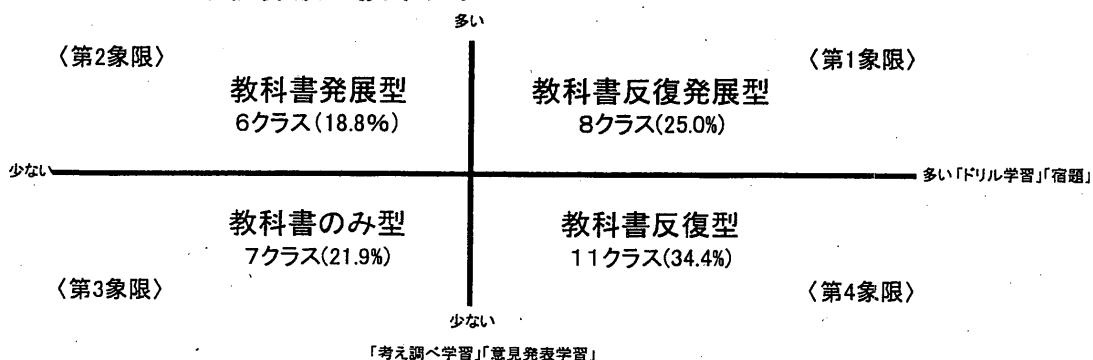
この類型化のもとでの調査対象クラスの分布は、「教科書反復発展型」=8クラス(25.0%)、「教科書発展型」=6クラス(18.8%)、「教科書のみ型」=7クラス(21.9%)、「教科書反復型」=11クラス(34.4%)である。全体として、反復する学習を伴う授業が、対象クラスの6割近くで行われている。

表3-10 小学校算数の授業の因子分析結果(因子負荷量)

	第1因子	第2因子
教科書学習	-0.002	0.076
ドリル学習	-0.092	0.778
宿題	0.292	0.884
考え調べ学習	0.872	0.181
意見発表学習	0.941	-0.128
負荷量平方和累積(%)	34.799	61.835

主成分分析、バリマックス回転

図3-2 小学校算数の授業タイプ



以上のような手続きを、小学校国語、中学校の数学・国語にも適用して類型化を試みた。小学校国語(表3-11、図3-3)では、算数と同様に教科書を使用している傾向がうかがえるが、加えて「考え調べ学習」も行われている。これは、漢字や語句調べをイメージして回答していると推測されることから、「新学力観」の影響というよりも従来から行われ

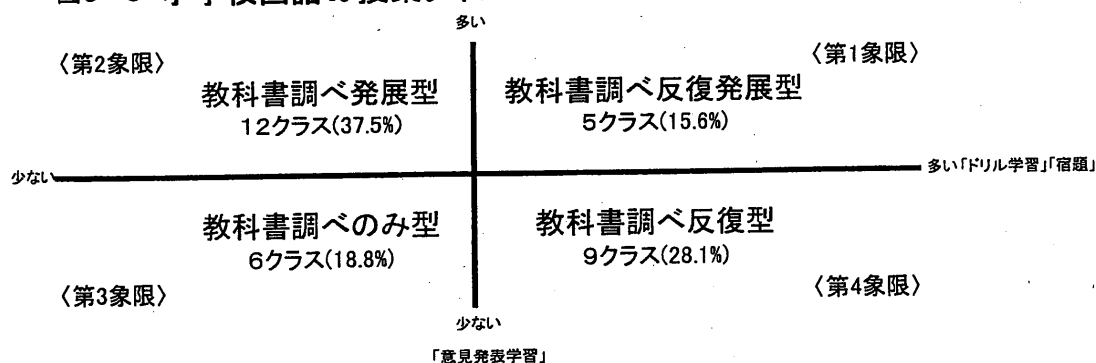
ている学習であると考えられる。これらの学習をベースに、意見を発表するような学習へ発展させる「教科書調べ発展型」授業と、ドリルや宿題で反復する「教科書調べ反復型」授業に類型化できる。さらに、小学校算数と同様に4象限をつくると、第1象限は、両方のタイプを行う「教科書調べ反復発展型」で5クラス(15.6%)、第2象限は「教科書調べ発展型」で12クラス(37.5%)、第3象限は、教科書の内容と漢字・語句調べのみで授業が展開している「教科書調べのみ型」で6クラス(18.8%)、第4象限は「教科書調べ反復型」で9クラス(28.1%)である。発展させる授業の割合が最も多いが、続くのは反復させる授業であり、授業が教室によってかなり異なっている様子をうかがうことができる。

表3-11 小学校国語の授業の因子分析結果(因子負荷量)

	第1因子	第2因子
教科書学習	-0.027	0.240
ドリル学習	0.745	-0.614
宿題	0.879	-0.002
考え調べ学習	0.691	0.543
意見発表学習	0.125	0.926
負荷量平方和累積(%)	36.436	68.185

主成分分析、バリマックス回転

図3-3 小学校国語の授業タイプ



中学校段階になると、数学・国語ともに小学校に見られた、教科書を使用しているという傾向はなくなる。中学校数学(表3-12、図3-4)においては、主成分分析の結果、抽出された2つの成分は、第1主成分が「教科書学習」「宿題」「考え調べ学習」「意見発表学習」が多い授業であり、第2主成分は「ドリル学習」が多い授業である。教科書で学習し、宿題を出して定着をはかりながら、一方では、教科書の内容を広げたり深めて、考えを発表させていくような「教科書宿題発展型」授業と、教科書は簡単に扱って、プリントなどでドリルを行ったり、小テストを繰り返すなどで徹底的に反復させる「反復型」授業

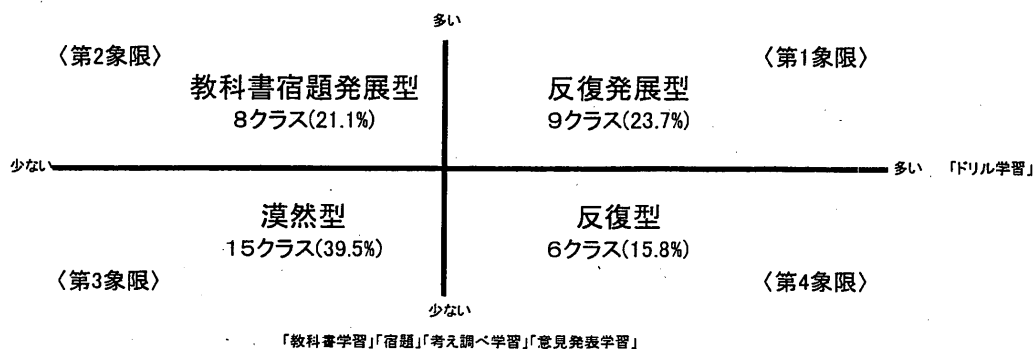
に類型化できる。さらに、これまでと同様に4象限をつくると、第3象限には、いずれの学習に対しても積極的な生徒のコミットが見られないタイプが位置する。つまり、反復であれ、発展であれ、教師のどのような働きかけも積極的に受け取ることがないタイプであり、「漠然型」として位置づけた。また、第1象限には、これとは逆に、いろいろな授業が行われていると受け取られている「反復発展型」の授業が位置づく。調査対象クラスの分布は、第1象限から9クラス(23.7%)、8クラス(21.1%)、15クラス(39.5%)、6クラス(15.8%)であり、「漠然型」が4割近くに達している。

表3-12 中学校数学の授業の因子分析結果(因子負荷量)

	第1因子	第2因子
教科書学習	0.400	-0.366
ドリル学習	0.158	0.987
宿題	0.971	0.117
考え調べ学習	0.676	-0.002
意見発表学習	0.853	-0.023
負荷量平方和累積(%)	46.271	68.703

主成分分析、バリマックス回転

図3-4 中学校数学の授業タイプ



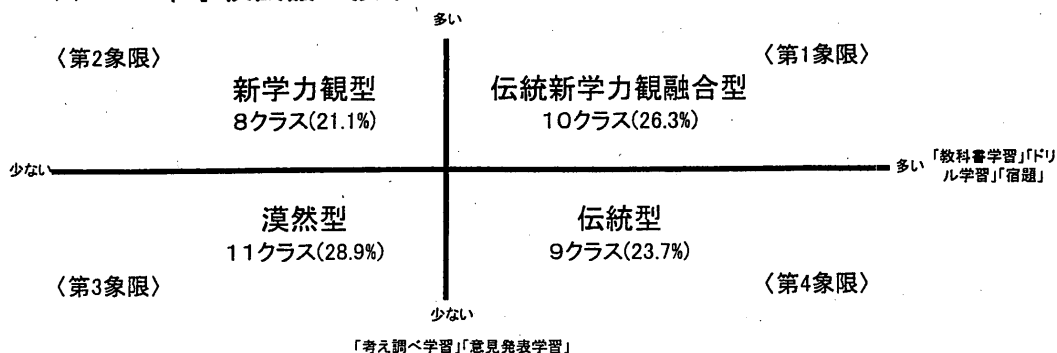
中学校国語(表3-13、図3-5)では、主成分分析の結果、抽出されたのは、第1主成分が「考え調べ学習」「意見発表学習」が多い授業であり、第2主成分は「教科書学習」「ドリル学習」「宿題」が多い授業である。中学校国語の授業においては、いわゆる「伝統型」授業と「新学力観型」授業を類型化できる。したがって、第1象限には、伝統的な授業も、新学力観的な授業も行われている「伝統新学力観融合型」が、第3象限には先にも述べた「漠然型」が位置する。分布は、第1象限から10クラス(26.3%)、8クラス(21.1%)、11クラス(28.9%)、9クラス(23.7%)であり、中学校国語ではさまざまなタイプの授業が行われていることがうかがえる。

表3-13 中学校国語の授業の因子分析結果(因子負荷量)

	第1因子	第2因子
教科書学習	-0.516	0.858
ドリル学習	-0.501	0.824
宿題	0.192	0.960
考え調べ学習	0.929	0.037
意見発表学習	0.961	0.124
負荷量平方和累積(%)	46.805	73.422

主成分分析、バリマックス回転

図3-5 中学校国語の授業タイプ



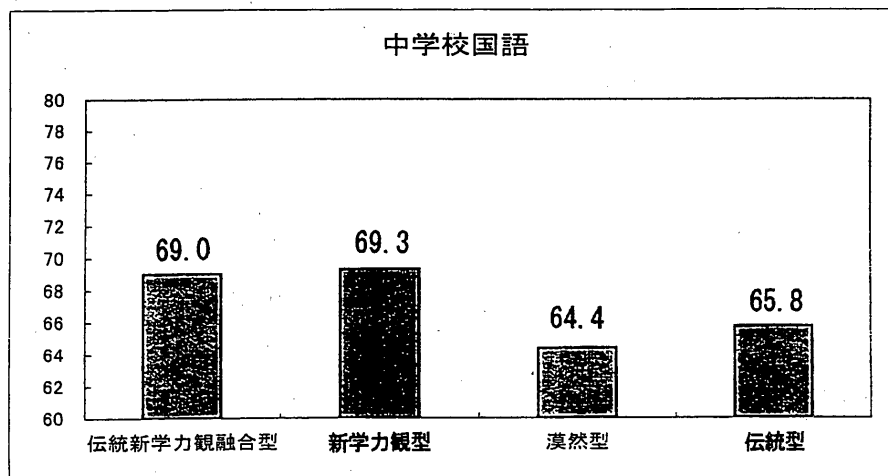
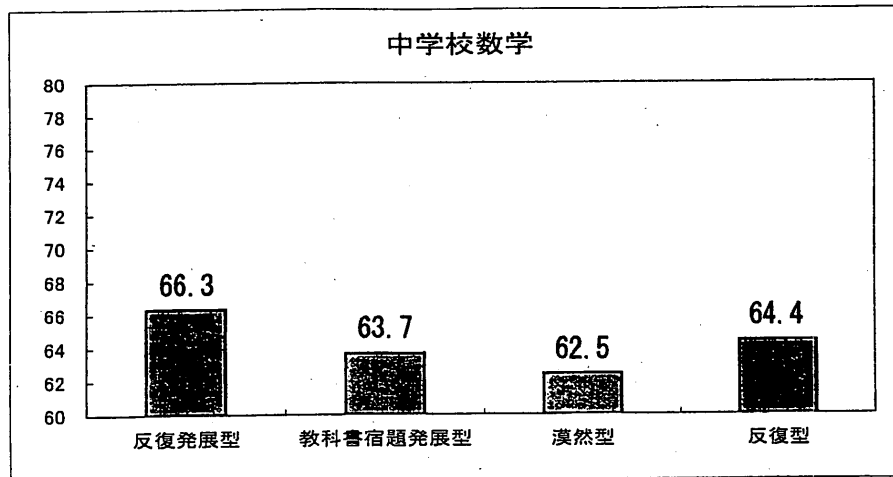
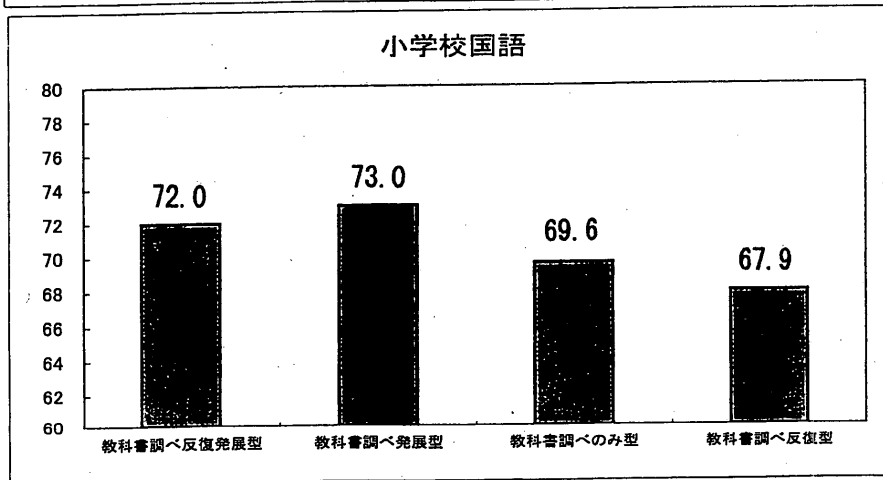
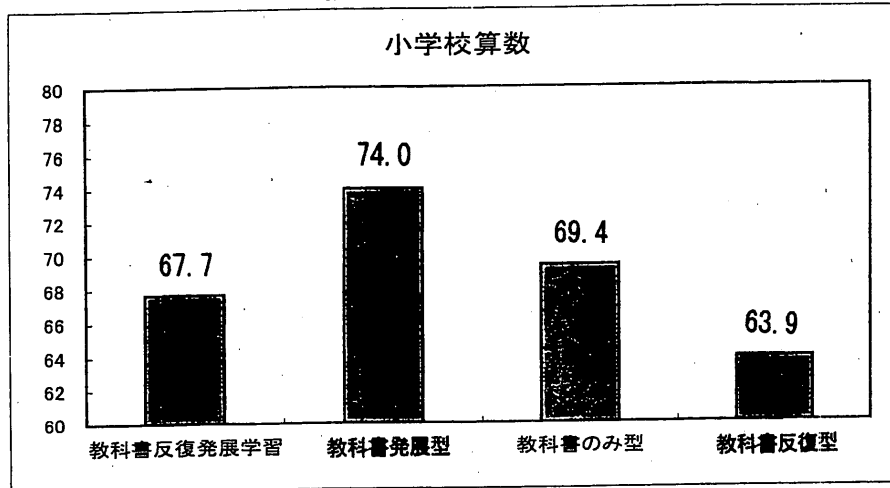
(2) 「授業タイプ」との関連

では、こうした「授業タイプ」と学業達成は、どのように関連しているのでしょうか。ここでは、抽出された授業タイプを調査対象者データに反映させて検討していく。

①学業達成

抽出した授業タイプごとに、今回の調査の教科ごとの正答率の平均値を図3-6に示した。小学校算数では、「教科書発展型」の得点が最も高く、「教科書反復発展型」「教科書反復型」と比べて差が有意 ($p < 0.05$) である。国語では「教科書調べ発展型」であり、「教科書調べ反復型」と比較すると差が有意 ($p < 0.05$) である。算数の教科書をベースにした学習、国語における教科書と漢字や語句調べをベースにした学習に加えて、それらを発展的に展開することで正答率が高まることが確認できる。一方で、算数の「教科書のみ型」や国語の「教科書調べのみ型」といった、子ども達が発展的な学習の展開や反復的な学習にコミットしていないと回答するような授業でも、正答率が最も低くなるわけではない。「教科書の内容をしっかりと勉強する」ことは重要であり、それなくして反復しても正答率が高まらないことが、これらの結果からうかがえる。

図3-6 授業タイプ別の正答率の平均値



単位: 点

一方、中学校の場合には、数学・国語を生徒の授業への積極的なコミットが見られない「漠然型」の正答率が最も低い。もはや、中学校では「伝統的」であっても「新学力観的」であっても、授業そのものが何らかの学習成果を修めるものとして機能していないようにも思われる。そうした傾向のもとで、教科ごとの特色を検討すると、数学に関しては、授業タイプごとの差は確認できなかった。一方、国語は「新学力観型」「伝統新学力観融合型」が「漠然型」と比較すると有意 ($p < 0.05$) であるとの結果が得られた。

もちろん、子ども達の学業達成には授業が影響しているばかりではない。というよりはむしろ、これまでの分析では、学校での授業の効果は弱化していることが推測されているわけである。そこで、「授業タイプ」がどのような子ども達とどのように関連しているを検討してみたい。

② 「授業タイプ」の影響

【通塾していない子ども達の学業達成】

学業達成への通塾の有無の影響については、先の分析でも明らかにされている。そこで、通塾している子ども達と、していない子ども達との「授業タイプ」と学業達成の関連を検討したのが表3-14である。

通塾と非通塾の正答率に差が確認されるのは、小学校では、算数の「教科書反復発展型」「教科書のみ型」、国語の「教科書調べのみ型」「教科書調べ反復型」であり、このタイプの授業では、非通塾の子どもが授業についていくことが難しくなっている可能性がある。中学校では、いずれの授業タイプでも、そうした差が確認される。中学生で塾にいかない(いけない)ことの方が、どのような授業を行っているかということよりも、正答率に大きな影響を及ぼすことが確認できる。

さらに、差について詳細に

表3-14 授業タイプ別の通塾・非通塾の正答率平均値

小学校算数授業タイプ	通塾	非通塾	差
教科書反復発展型	73.2	67.0	-6.2 *
教科書発展型	75.9	73.7	-2.1
教科書のみ型	76.5	67.0	-9.6 *
教科書反復型	68.3	63.7	-4.6

小学校国語授業タイプ	通塾	非通塾	差
教科書調べ反復発展型	77.6	71.9	-5.7
教科書調べ発展型	76.0	72.4	-3.6
教科書調べのみ型	75.9	65.1	-10.8 *
教科書調べ反復型	74.9	66.5	-8.4 *

中学校数学授業タイプ	通塾	非通塾	差
反復発展型	74.6	60.5	-14.1 *
教科書宿題発展型	75.1	54.7	-20.4 *
漠然型	74.3	48.7	-25.6 *
反復型	74.0	56.8	-17.2 *

中学校国語授業タイプ	通塾	非通塾	差
伝統新学力観融合型	73.9	66.9	-7.0 *
新学力観型	72.9	64.0	-8.9 *
漠然型	70.3	59.0	-11.3 *
伝統型	70.7	62.4	-8.3 *

値: 点、差の検定: * $p < 0.05$

検討していくと、学校段階や教科をとわず「第3象限」に位置する授業での差が最も大きく、いずれの場合も、最も正答率の高い授業との間での差が有意 ($p < 0.05$) であった。「授業タイプ」の類型化の手続き上、第3象限に位置する授業タイプは、子ども達が質問項目にあげられたような授業について「あまりない」と回答した割合が多くなることから類推すると、通塾していない場合、教師がどのような授業を行っているつもりであっても、子どもの授業へのコミットの程度が正答率と関連しているといえよう。

【家庭の文化的環境別の学業達成】

家庭の文化的環境による正答率については別に報告しているので、ここでは省略するが、結果だけ述べるならば、上位グループと下位グループの差は、小学校算数で8ポイント、国語で7ポイント、中学校数学で14ポイント、国語で10ポイントである(苅谷他2002)。したがって、「教室にいる子どもたちの家庭の文化的環境がどのようなものであるかによって、どのような授業を行えるかが決まる」という、家庭の文化的環境の授業への影響を示唆する見方も当然ありうる。

この点を検証するために、家庭の文化的環境グループと授業タイプとの関連を示したのが表3-15である。

中学校の数学・国語、小学校の算数では、大きな影響関係は確認できなかった。また、小学校の国語では、「教科書調べのみ型」の授業に家庭環境の上位グループの子供が多いことが確認できたが、「教科書調べのみ型」は、生徒の授業へのコミットの程度が低いものである。したがって、下位

グループの子供が多いから「伝統的」な授業に、上位グループの子供が多いから「発展的」な授業になるという傾向は確認できなかった。

表3-15 授業タイプ別の家庭の文化的環境グループの分布

小学校算数授業タイプ	下位	中位	上位
教科書反復発展型	39.4	29.0	31.6
教科書発展型	30.5	36.4	33.2
教科書のみ型	36.3	34.6	29.1
教科書反復型	36.1	31.1	32.8

小学校国語授業タイプ	下位	中位	上位
教科書調べ反復発展型	43.7	32.6	23.7
教科書調べ発展型	34.2	36.1	29.7
教科書調べのみ型	27.8	27.8	44.4
教科書調べ反復型	39.4	30.3	30.3

中学校数学授業タイプ	下位	中位	上位
反復発展型	37.3	31.3	31.3
教科書宿題発展型	30.7	33.6	35.7
漠然型	35.1	29.8	35.1
反復型	31.2	36.1	32.7

中学校国語授業タイプ	下位	中位	上位
伝統新学力観融合型	34.3	32.7	33.0
新学力観型	27.5	36.3	36.3
漠然型	36.1	31.6	32.2
伝統型	33.7	34.1	32.1

値:%

表3-16 授業タイプ別の家庭の文化的環境グループの正答率平均値

ここに至って「授業タイプ」と家庭の文化的環境との正答率の関係を検討する余地が出てくる。表3-16がその結果である。小学校算数では、「教科書反復発展型」「教科書反復型」という反復的な授業が行われているタイプで、上位グループと下位グループで差が確認できる。一方、国語では、「教科書調べ発展型」という発展的な授業が行われているタイプで差が確認できる。中学校では、数学・国語のいずれのタイプでも差が確認されることから、どのようなタイプの授業でも、上位グループと下位グループの差を縮めることはできないという結果となっている。

【NoStudy Kidsの学業達成】

先の分析に示されたNoStudy Kidsと「授業タイプ」の関連は、表3-17に示した。小学校算数で、NoStudyと

小学校算数授業タイプ	下位	中位	上位	(下位)-(上位)
教科書反復発展型	63.9	66.8	73.9	-9.9 *
教科書発展型	69.8	77.5	74.8	-5.0
教科書のみ型	69.0	71.9	67.4	1.6
教科書反復型	58.2	71.9	67.2	-9.1 *

小学校国語授業タイプ	下位	中位	上位	(下位)-(上位)
教科書調べ反復発展型	69.3	74.9	75.3	-6.0
教科書調べ発展型	68.9	72.9	79.6	-10.7 *
教科書調べのみ型	65.8	70.3	71.3	-5.5
教科書調べ反復型	63.2	74.9	69.9	-6.8

中学校数学授業タイプ	下位	中位	上位	(下位)-(上位)
反復発展型	59.9	69.1	71.4	-11.5 *
教科書宿題発展型	51.7	65.6	73.3	-21.7 *
漠然型	55.7	66.4	66.2	-10.5 *
反復型	55.6	64.8	74.9	-19.2 *

中学校国語授業タイプ	下位	中位	上位	(下位)-(上位)
伝統新学力観融合型	64.6	72.1	72.4	-7.8 *
新学力観型	65.0	70.4	72.9	-7.9 *
漠然型	60.6	64.6	68.4	-7.7 *
伝統型	58.9	70.3	70.2	-11.3 *

値:点、差の検定:*p<.05

表3-17 授業タイプ別のNoStudy・非NoStudyの正答率平均値

小学校算数授業タイプ	NoStudy	非NoStudy	差
教科書反復発展型	63.4	69.8	-6.4
教科書発展型	66.1	75.5	-9.4 *
教科書のみ型	60.2	73.9	-13.8 *
教科書反復型	61.2	67.7	-6.5 *

小学校国語授業タイプ	NoStudy	非NoStudy	差
教科書調べ反復発展型	69.6	74.2	-4.6
教科書調べ発展型	61.5	75.5	-14.0 *
教科書調べのみ型	63.6	72.2	-8.6 *
教科書調べ反復型	63.0	72.6	-9.6 *

中学校数学授業タイプ	NoStudy	非NoStudy	差
反復発展型	50.9	70.1	-19.2 *
教科書宿題発展型	49.4	68.7	-19.3 *
漠然型	47.9	66.5	-18.7 *
反復型	51.6	68.8	-17.2 *

中学校国語授業タイプ	NoStudy	非NoStudy	差
伝統新学力観融合型	63.7	70.6	-6.8 *
新学力観型	65.6	70.0	-4.4
漠然型	58.8	66.2	-7.4 *
伝統型	60.2	67.6	-7.5 *

値:点、差の検定:*p<.05

非 NoStudy に差が確認されないのは、「教科書反復発展型」、国語でも「教科書調べ反復発展型」である。いずれの場合にも、「伝統的」な授業と「新学力観的」な授業の両方が行われているタイプである。学校外で全く学習をしない子どもには、学校でさまざまな授業が密度濃く行われる必要があることがわかる。中学校では、数学ではすべてのタイプで差が確認される。もはや、どのような授業が行われても、学校外での学習が行われない限り、中学校数学の学習を進めていくことは難しいことがわかる。一方、国語では「新学力観型」で差が確認されない。中学校国語は、学校外での学習を行わない子どもにとっても「新学力観的」な授業が重要であることが示唆されている。

(3) まとめ

これまでに「授業タイプ」と学業達成の関係を、塾や家庭の文化的環境の影響、さらには学校以外で全く勉強をしない子ども (NoStudy Kids) に焦点をあてて分析を試みた。概観するならば、学校段階によって、また教科によって、「授業タイプ」の影響は異なっていて、そもそも「伝統的」か「新学力観的」かといった振り子のような議論の俎上には乗らない複雑さをもっていることが明らかになったといえる。

その上で、これまでの分析をもとに、学校段階や教科を考慮した授業の可能性を示唆してみたい。図3-7は、これまでの分析で学業達成との関連が確認された要因 (○△×) を、「授業タイプ」の類型化の図に投入したものである。全体の傾向としては、一貫性のあるものとはいえず、一概にどのタイプの授業が最も良いとは断言しにくい結果となっている。

そこで、ここでは若干の傾向を指摘することで、まとめとしたい。小学校算数では、「教科書発展学習」が (○○○×) であり、最も可能性が開かれているようである。つまり、教科書の内容の削減という趨勢にあつて、教科書の内容をいかに発展・深化できるかが重要であると考えられる。しかしながら、NoStudy Kids にとっては「教科書反復発展型」であり、学校外で全く勉強しない子どもにとっては、一定の反復学習が授業で行われることは重要である。小学校国語では、「教科書調べ反復発展型」が (△○○○) であり、反復的な学習も、発展的な学習も行われる場合に、最も可能性が開かれている。小学校の場合、全体として、発展的な学習を行う場合に可能性が開かれる結果となつてはいるが、いずれのタイプでも「教科書学習」は行われていることから鑑みて、「教科書の内容の吟味と取り扱い」という観点なくして、反復学習や発展学習だけをイメージすることは避けなければならない。

中学校数学では、通塾や非通塾、家庭の文化的環境の差は、いずれの授業タイプでも残ってしまう。また、NoStudy Kids にとって効果がある授業も特定できない。中学校数学に

図3-7 授業の可能性

【小学校算数】		【中学校数学】	
教科書発展型 ○ 全体 ○ 非通塾 ○ 家庭の文化的環境 × NoStudy Kids	教科書反復発展型 △ 全体 × 非通塾 × 家庭の文化的環境 ○ NoStudy Kids	教科書宿題発展型 × 全体 × 非通塾 × 家庭の文化的環境 × NoStudy Kids	反復発展型 × 全体 × 非通塾 × 家庭の文化的環境 × NoStudy Kids
教科書のみ型 △ 全体 × 非通塾 ○ 家庭の文化的環境 × NoStudy Kids	教科書反復型 × 全体 ○ 非通塾 × 家庭の文化的環境 × NoStudy Kids	漠然型 × 全体 ×× 非通塾 × 家庭の文化的環境 × NoStudy Kids	反復型 × 全体 × 非通塾 × 家庭の文化的環境 × NoStudy Kids
【小学校国語】		【中学校国語】	
教科書調べ発展型 ○ 全体 ○ 非通塾 × 家庭の文化的環境 × NoStudy Kids	教科書調べ反復発展型 △ 全体 ○ 非通塾 ○ 家庭の文化的環境 ○ NoStudy Kids	新学力観型 ○ 全体 × 非通塾 × 家庭の文化的環境 ○ NoStudy Kids	伝統新学力観融合型 ○ 全体 × 非通塾 × 家庭の文化的環境 × NoStudy Kids
教科書調べのみ型 △ 全体 × 非通塾 ○ 家庭の文化的環境 × NoStudy Kids	教科書調べ反復型 × 全体 × 非通塾 ○ 家庭の文化的環境 × NoStudy Kids	漠然型 × 全体 ×× 非通塾 × 家庭の文化的環境 × NoStudy Kids	伝統型 △ 全体 × 非通塾 × 家庭の文化的環境 × NoStudy Kids

関しては、学校の授業だけでは、そのような差は如何ともしがたいようである。ただし、図3-7に(××)で示したように、「漠然型」の授業の場合、通塾している子ども達としていない子ども達の差が最も大きく、通塾していない子ども達にとって最も不利であることが指摘できる。「伝統的」であっても、「新学力観的」であっても、まずは、生徒の授業へのコミットの程度を高めることが重要であるといえよう。国語に関しても、数学同様の傾向が指摘できるものの、NoStudy Kidsにとっては、「新学力観型」の授業が最も効果的であり、全体の正答率を高めるタイプとして「新学力観型」「伝統新学力観融合型」をあげることができる。国語の場合には、「漠然型」の授業を避けて「新学力観的」な授業を展開していくことが重要であるといえよう。

もちろん、子ども達の授業へのコミットは、子どもの学習に対する意味や意義に対する意識とも密接な関係がある。続いては、そうした点に踏み込んで、議論を展開してみたい。